



第1地域 ロータリー財団地域コーディネーター 新井 和雄（下館 RC）

ロータリー財団は、社会に持続可能な良い変化をもたらすための活動を支えています。例えば、平和構築と紛争予防や環境の保護、地域社会の経済発展、基本的教育と識字率向上、疾病予防と治療、水と衛生、母子の健康など7つの重点分野に焦点をあてた補助金プログラムは、ロータリーの支援を必要としている人々に希望の光を届けています。またポリオ根絶活動は、国際的な連携により感染者数を劇的に減少させる成果を挙げています。

本稿では、これら重点分野の最初に掲げられ「平和構築と紛争予防」に貢献する人材育成の取り組みとして、ロータリー平和センターについてご紹介いたします。

ロータリー平和センタープログラムは、1999年に創設され2002年に初の平和フェローが誕生しました。現在、世界に7つのセンターがあり、115カ国以上から1,500人を越える平和フェローが卒業しています。日本では、国際基督教大学（以下 ICU）がアジア唯一の平和センターとして選ばれ、平和研究の修士号を取得する2年間のプログラムを提供しています。そして、ICUの所在地である第2750地区とその周辺6地区により「ホストエリア」が組織され、文化交流や研修旅行、修了式などの活動が展開されています。

さらに、インドのプネーにあるシンピオシス国際大学に、修了証プログラムの平和センターが新設されることが決定しており、2026年に募集を開始し、2027年から受け入れを開始する予定です。

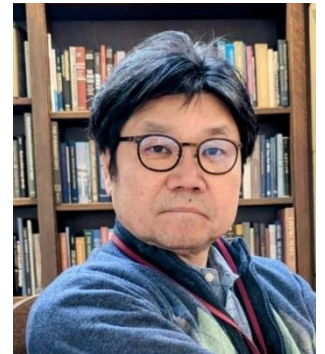
ここで、ICU ロータリー平和センター長である新垣修教授の新たな取り組みをご紹介します。新垣教授は、従前の広島研修旅行を日本ならではの平和教育の場と位置づけるとともに、新たに東日本大震災の被災地に着目し、災害の視点から東北研修旅行を導入されました。教授は、そこにあるのは苦難だけではなく、立ち直っていく人々の力強さや希望であり、海外では災害が武力紛争を引き起こす事例も少なくないことを指摘されています（新垣 2025）。そして、平和構築の課題として「戦争の記憶」と「災害の経験」という二つの異なる文脈から平和を学ぶ点に触れ、日本の平和センターの価値をさらに高めておられます。

この平和の使者たちを世界に送り出すプログラムは、ロータリー財団から毎年400万ドルを超える資金が投下されており、ロータリーが如何に平和構築に力を入れているかがおわかり頂けると思います。加えて前述した日本ならではの活動は、日本全国のロータリー会員全員のご協力によって支えられています。ここに、世界平和を希求する皆様の思いに深く敬意を表するとともに、皆様の地区から世界へ羽ばたく平和フェローの推薦をお願い申し上げます。

（引用）新垣修，ロータリーボイス，2025

「戦争の記憶」と「災害の経験」の継承— ICU ロータリー平和センターの新たな挑戦 —

ICU ロータリー平和センター，センター長 新垣 修





第2地域 ロータリー公共イメージコーディネーター補佐 宮崎 陽市郎（東京三鷹 RC）

ロータリー会員の皆様お元気ですか、ARPIC の宮崎陽市郎です。

所属は東京三鷹 R C です。今月のコーディネーターNEWS では、「ポリオ根絶活動をどのようにロータリーの公共イメージ向上につなげて行くか」という私の個人的な活動を紹介したいと思います。

皆様の記憶に残っていると思いますが、2020 年 8 月 25 日に世界保健機関 (WHO) がアフリカ地域での野生株ポリオウィルス根絶宣言がされ、この歴史的出来事をマスメディアでは大きく取り上げて報道されました。しかしどの番組や記事を見ても「ロータリークラブ」という言葉は使われませんでした。嬉しさと、残念さが入り混じり憤りさえ感じたことを今でも覚えています。これをきっかけに私は決意したのです。ガバナーエレクトであった 2022 年 10 月にロータリーの取り組んでいるポリオ根絶活動の周知と寄付を募るため、「ポリオ根絶日本縦断サイクリングチャレンジ」として、北海道稚内から鹿児島県の佐多岬まで 2700 キロを 23 日間で走破しました。当時の佐藤 RI 理事のお声かけで、各地区のガバナーやガバナーエレクトの協力を得て、新聞やテレビの取材を受け、寄付も 2000 万円を集めることができたのです。

翌年のガバナー年度には、新潟柏崎から東京の有明まで走るサイクリングチャレンジ行い、私ども第 2750 地区のポリオ根絶イベント会場にゴールいたしました。4 月には大阪から日本橋までの 520 キロを 30 時間で一気に走るチャレンジを決行しました。

昨年の 2024 年 10 月の世界ポリオデーに合わせ、二度目の日本縦断サイクリングチャレンジを北海道根室から長崎県佐世保の神崎鼻岬まで 2700 キロを 22 日間で走破しました。

北海道釧路では NHK の取材を受け、その日の夕方には何度もテレビで放映されました。この年は、Raise for Rotary というサイトで寄付を募りました。このサイトはクラブや個人の活動を紹介し SNS で活動を発信し、ロータリー以外の方の寄付を募り、又ロータリー会員の寄付はご自身のロータリー財団への寄付実績になります。チャレンジ・お祝い・記念日・自分の得意なことを行い、サポートしたい内容を選ぶことができます。例えば、ポリオプラス基金・ロータリー災害救援基金・WF(国際財団活動資金)・7 つの重点分野への寄付を募ることができるのです。

日本では個人の活動で寄付を募る文化はあまりありませんが、海外ではよく行われています。世界を変える行動人としてクラブでの奉仕活動、そして個人の活動を友人やロータリー会員以外の方に伝え、ロータリークラブのイメージ向上を図ろうではありませんか。

マスコミはクラブや地区の活動、ましてロータリークラブという団体の名前はなかなか発信していただけないですが、インパクトある活動は取り上げていただけます。自ら行動するのがロータリーです。





第3地域 行動計画推進リーダー：恒久基金・大口寄付アドバイザー 硯川 昭一（熊本江南 RC）

現在2つのお役目を頂戴しております。一昨年の今頃、佐藤元 RI 理事より、APC（アクションプランチャンピオン）という聞きなれないお話がありました。第1地域菅原さんと、第2地域桑澤さんとで、一体何をすればいいのだろうかと手探りの日々でした。

ここでこの2年を振り返ってみたいと思います。その後4半期に1回ステファニー・アーチック RI 会長エレクトとのリモート会議も行われ、少しずつ行動計画推進へ取り組む姿勢が分かってきました。年が明けまして、国際協議会あたりから、クラブ単位まで行動計画を浸透させるために、各地区に地区 APC を設置して欲しいと地域 APC とガバナーエレクトにご依頼が参りました。ガバナーエレクトにはガバナーへ向けた準備が大変な時でしたが、ご協力頂き、5月末には全地区に地区 APC が誕生し、オンラインで行動計画の進め方の話し合いを行い、各地区単位での、クラブへの指導をお願いし、引き続きロータリークラブ・セントラルへの目標入力をして頂くお願いをする運びとなりました。



ただ、混乱したのは、同時に3年間計画、3-Year Rolling Goals の登場でした。クラブに継続性をもたらすために、会長、会長エレクト、会長ノミニ、いらっしゃらなければ直前会長を交えて、将来のクラブの姿をイメージし、定量的な数値目標を3年先まで想定して頂き、それを毎年繰り返して頂くというものでした。しかしながら、肝心のその3年先の目標を入力するツールであるロータリークラブ・セントラルの改修がいつになるか分からず、そこで、第2地域桑澤さんが担当される Japan Portal Site 内において、3年間一堂に見て、入力できるエクセル仕様の入力表が暫定的に作られた訳です。12月に入ってやっとロータリークラブ・セントラルに4つの優先事項に沿って、26項目3年間入力できるように改修されましたが、残念ながら、3年間で単年度しか見れず、その結果、日本独自にクラブをサポートするグーグルフォームによる、今年度、来年度の目標及び達成状況を設定する方法がスタートすることになりました。

ある意味でロータリークラブ・セントラルに入力しながら、グーグルフォームにも記入するという煩雑さが生まれた訳ですが、今まで、ロータリークラブ・セントラルになかなか到達できなかったクラブ会長さん方にとっては大きな効果を生んでいます。第3地域の APC としての役職を務めまして改めて思いますことは、11の地区は事情も環境もそれぞれに異なるということです。その地区その地区のやり方、クラブそれぞれのやり方を尊重すべきと思いました。さらに、ガバナーによるクラブサポートミーティング、地域リーダーによるガバナーサポートミーティングも始まりました。他のクラブや地区の状況をお互い知ることに大きなヒントがあります。まずは挑戦いたしましょう！

次に、恒久基金/大口寄付アドバイザーとしましても、本年度から活動を始めました。私は32年間、人工透析をしながら、今まで仕事もロータリーも頑張って参りました。その間、多くの方々のご支援、ご理解を頂きました。ひたすら感謝の思いです。当初は、5年か10年程度しか生きられないから、仕事も安心して任せられないと言われることもありましたが、そのたびに、絶対長生きして見返してやると歯を食いしばって参りました。

人工透析には大きな医療費がかかりますが、有難いことに、透析患者は難病指定で特別の保険制度があり、軽い負担で治療を受けることができます。私はいつかどんな恩返しができるかをずっと考えてきましたが、正にこの役職は自分自身にとっても大きなチャンスと思っています。新しい日本の寄付文化を一步步作って参りたいと思います。